

令和5年度・令和6年度「ちばっ子の学び変革」推進事業研究成果報告書

市川市立塩焼小学校

研究主題

「どの子も参加できる言語活動の充実 ～体験や経験を生かして「書く」につなげる～」

1 学校の概要

本校は市川市南部の埋め立て地域に、1981年に創立した小学校である。関東一円に塩を供給していた行徳の塩田が名前の由来である。学級数28クラス現在児童数797名を擁する小学校で、児童らは「命はなまる！かしこく誇らしくねばり強く」という学校教育目標のもと、すこやかな環境でのびのびと過ごしている。授業研究は本事業を機会に令和5年度より国語科に絞り、取り組んできた。

2 研究の概要

(1) 児童生徒の実態と課題

令和4年度の「全国学力・学習状況調査」の結果分析では、思考力を問う設問の正答率が高いが、「書くこと」では、正答率が低い傾向にあった。自分の考えを文章化することができない、もしくは問題文の要約になってしまうことがわかった。令和5年度の結果分析でも、「書くこと」、記述式の問題ともに正答率が約半分または半分に満たない結果であった。領域別のグラフを見ても「書くこと」が低く、また無解答が全国平均と比べて多かった。令和5年度は無解答率が多かった設問では、文章を読んで理解したことについて、既存の知識と結び付けて自分の考えを文章化すること、また文章の目的や読む相手を意識して自分の考えをまとめる力も求められていた。これらを正しく回答するには、これまでの言語活動で培ってきた基礎基本に加え、文章を読んで自分の考えをもち、それをわかりやすく伝える力が必要になってくると考えられる。また、令和4年度と5年度が共通して無解答率が高いことより、問題文を見たときに何も書かずに諦めてしまう児童も多く、自分の考えを形成する過程が不十分であることや、書くことに苦手意識や抵抗をもつ児童が多いことがわかる。そのため、今年度の研究を「書くこと」に設定した。令和6年度の「全国学力・学習状況調査」の結果では、無解答率の低下や記述式の設問の正答率が高くなるなど、これまで「書くこと」に力を入れてきたことの成果が出てきているところである。今年度の研究では、何も書けない子も「書きたい」と思えるよう、自ら経験してきたことや体験活動を思い起こし、相手意識を明確にすることで発信する意欲を高められるよう取り組んだ。

(2) 学力向上のための取組

ア 検証授業の実施

全国学力・学習状況調査の結果を受けて、令和5年度は文章全体の構成や書き表し方を身に付けることに重点を置き、読み手に伝わりやすい文章の構成や自分の文章のよさを見つけられるよう取り組んできた。令和6年度は、上記に加え作文や日記、意見文を通して自分の考えをわかりやすく伝えられるようにしていく手立てを考え、『思考し、表現する力』を高める実践モデルプログラムに沿い、検証授業を3回行った。

第1回 令和6年6月28日

【単元名】千葉県の魅力を発信しよう

【展開学年】4年

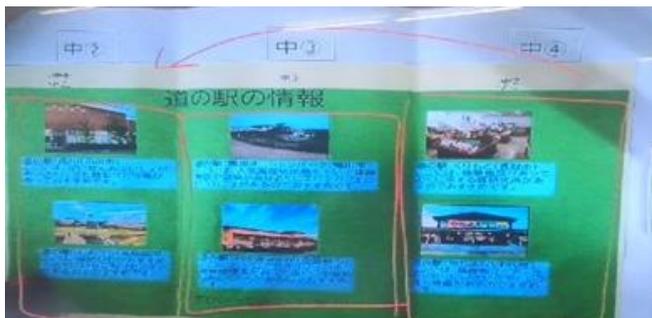
【教材名】「リーフレットでほうこく」(教育出版 4年上)

「自分の考えを形成する」ために、社会科や総合的な学習の時間にもった千葉県の課題からどんなことを伝えたいかをもとにリーフレットのテーマを決め「何を伝えたいか」を明確にしてリーフレットを作成することに取り組んだ。それにより、完成したリーフレットをどこに置くかを考えることで、目的意識と相手意識をもつことができた。

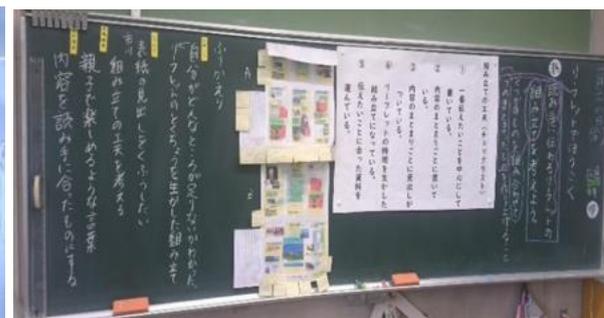
「友達と互いに学び合う」ために、交流する相手を話しやすい相手となるようペアを組むことで、どの子も推敲の付箋に考えを書いたり話したりすることができた。

タブレットで情報収集し、リーフレットを作成した後、相手により伝わりやすいリーフレットの組み立てになっているかについて、印刷したリーフレットをもとに推敲した。紙に印刷することで、より完成品をイメージしやすくなり相手に伝わりやすい組み立てになっているか考えることができた。〈写真1〉また、タブレット上で行わせる作業と板書に残すポイントの差別化〈写真2〉を図るなどユニバーサルデザインの視点をもって授業づくりを行ったことで、どの子も参加できる言語活動に繋がった。

〈写真1 タブレットで作成、紙で推敲〉



〈写真2 板書〉



【単元名】情報ノート

【展開学年】5年

【教材名】「情報ノート」(教育出版 5年上)

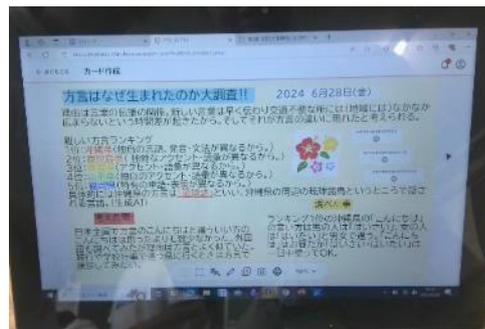
「情報を収集し調べる」ために、社会科の調べ学習などを通じて、情報収集の方法やまとめ方を繰り返し指導した。〈写真3〉また、適切なミニ作文の題材を教師が選び示していくことで、集めた情報の中から適切な資料を選び出せるようになった。

生成AIと自分の意見との違いを考え、生成AIの意見を批判的な視点で見ることによって、自分の考えを見直し「自分の考えを形成する」ことに繋がった。授業支援ソフトを用いて情報ノートを共有しながら作成する〈写真4〉ことで、友達同士でアドバイスをしながら協働的な学びを実現することができた。

〈写真3 板書〉



〈写真4 情報ノート〉



第2回 令和6年10月18日

【単元名】たのしかったことをかこう

【展開学年】1年

【教材名】「たのしかったことをかこう」(教育出版 1年上)

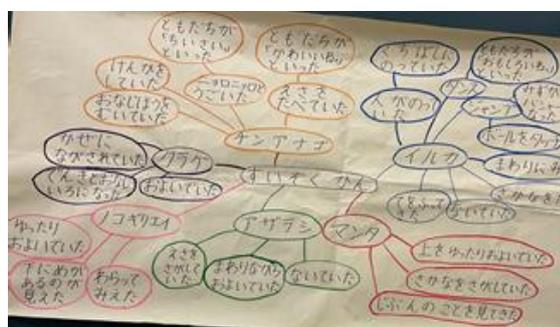
校外学習において水族館で見たこと〈写真5〉や話したことの経験を思い起こさせることで、児童が時間いっぱい、書きたいことを考えて書くことができた。

「自分の考えを形成する」ためにマッピング図〈写真6〉を使って作文の内容を考える時間を設けることで、普段書くことに苦手意識のある児童も、内容を選びながら様子を思い出して書くことができた。

〈写真5 水族館の生き物の写真〉



〈写真6 マッピング図〉



【単元名】スーパーマーケットのひみつ

【展開学年】3年

【教材名】「取材したことをほうこく文に」(教育出版 3年上)

「自分の考えを形成する」ために、スーパーマーケットで実際に見たり聞いたりしたメモをもとに情報を整理した上で自分がわかったことや思ったことを考えた。どのような報告文にしたら自分の考えが読み手に分かりやすく伝えられるかという目的意識を明確にすることにより、本時で見つけた説明文の工夫〈写真7〉がすべて「分かりやすく書く」という目的意識につながった。

また、ラーニングマウンテン〈写真8〉をもとに単元計画をしっかりと立てたことで、ゴールと相手意識が明確になり子供たちの学習の見通しがもてた。

〈写真7 分かりやすく書くための工夫を見付ける授業〉



〈写真8 ラーニングマウンテン〉



第3回 令和6年12月6日

【単元名】1年生におもちゃのせつめい書をプレゼントしよう

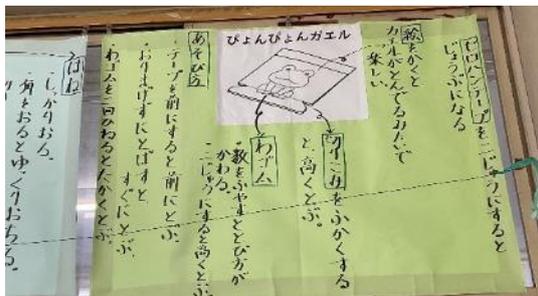
【展開学年】2年

【教材名】「おもちゃのせつめい書を書こう」(教育出版 2年下)

子供たちの「書きたい」という意欲を高めるため、生活科「つくる楽しさはっけん」と関連付け、おもちゃ作りの楽しさを経験させた。その上で、1年生におもちゃの説明書をプレゼントしたいという思いをもたせ、書く活動に取り組んだ。経験から得た自分の気づきや考え(写真9)を取り入れることによって、1年生にわかりやすく伝えるという目的・相手意識を明確にすることに繋がった。

また、毎時間の学習の振り返りが小さな再構築の積み重ねであると捉え、めあてに沿った振り返りの視点を示し「思考の過程を振り返る」とともに、チェックリストを用いて互いの説明書を読み合う(写真10)ことで、身に付いた力を自覚することができた。

〈写真9 おもちゃづくりで得た気づきや考え〉



〈写真10 互いに読み合う活動〉



【単元名】塩焼小学校を「命はなまる」な学校へ! ~校長先生への提案文~

【展開学年】6年

【教材名】「十二歳の主張」(教育出版 6年下)

十二歳になって成長した自分が、今まで過ごしてきた塩焼小学校をさらによくするためにそれぞれの立場で提案文を書くという目的意識と、その提案文を校長先生へ届ける(写真11)という相手意識を明確にして指導した。「課題を明確にする」ために自分の立場や視点を明確にし、パネルディスカッションを行ったことで、自分の主張の弱い部分や根拠が乏しい部分を自分で認識することができた。また、パネルディスカッションで質問が出たことや指摘されたことについて、さらに自分で調べようとするなど主体的な活動となっていた。

また、文書作成ソフトを用いて作成した提案文を、ポイントをもとに推敲し修正したりするなど、「友達と互いに学び合う」ためにICTを効果的に活用する〈写真12〉ことで、どの子ども学習意欲を高めて主体的に学びを進めることができた。

〈写真11 校長先生からの思いを伝える〉



〈写真12 タブレット端末での交流活動〉



イ 定期的な書く活動

学年に応じて、単元や行事などに関連させながら書く活動を定期的に取り入れた。ミニ作文やはがき新聞などを通して、書く量の増加や内容の質的向上、文章を構成する力の向上を図った。今年度ははがき新聞を書くために講師を招聘し、大事な情報を選んで簡潔にまとめる力を高めるための方法を教示してもらうことで、児童の書く意欲にもつながった。また、タブレット端末を用いて書いた文章を読み合ったり、生成AIを用いて推敲したりと、ICT活用にも力を入れてきた。

(3) 加配教員（学習サポーターを含む）の活用

4・5・6年生の書く活動の単元において、少人数指導に入った。また、T2による配慮の必要な児童への声掛けや観察などにより、個別支援を行った。担任だけで指導するよりもきめ細やかな指導が可能となり、より多くの児童がめあてに沿って学習に取り組むことができ、どの子ども参加できる言語活動の充実を図ることができた。

3 研究の成果

- 出来事の順に書くことや順序を表す言葉を丁寧におさえることで、低学年でも順序立てて考える問題の正答率が上がった。
- チェックリストを用いて振り返りの視点を明確にしたことで、ゴールへの見通しや自分に付いた力を自覚できた。
- 情報の収集、構成の検討、記述、推敲等の際に、単元や学年の実態に応じて効果的にICTを活用することで、情報整理のツールや思考する時間の確保につながった。
- 書く活動につなげるためにパネルディスカッションを行うなど、様々な言語活動を取り入れることで、主体的な活動へつながられた。
- 書く活動に入る前に、他教科で学習したことや学校行事などの共通経験、単元に向けて教師が意図的に計画した経験、子供たち自身が今まで経験してきた様々なことを想起させ、相手意識や目的意識を明確にすることで「書きたい」「発信したい」という意欲を高めることができた。
- 全国学力・学習状況調査の結果から本校の足りない力を分析し、『思考し、表現する力』を高める実践モデルプログラム』のサイクルに沿った授業計画を立て実践することで、児童らの「書く力」の育成に繋がった。

○全校を通して定期的に書く活動を取り入れたことで、書くことに慣れ、令和6年度の全国学力・学習状況調査では無解答率が平均を下回るなど、それまでに比べ無解答率が減少し、正答率が上がった。また、系統性を意識して「書くこと」へのアプローチをしたことで、学習指導要領の内容項目全てにおいて全国平均を上回ることができた。

4 今後の課題

- 全国学力・学習状況調査にて正答率の低かった主語と述語との関係、修飾と被修飾との関係を捉える力などの文法も含め定着させていく。
- 今年度の検証授業ではICTを活用している場面が多くあったため、国語科における深い学びを実現するためにどのように活用していくべきかを考えていく必要がある。
- 『『思考し、表現する力』を高める実践モデルプログラム』を今後も引き続き活用していくことで、系統的かつ教科等横断的に学習を進めていく。また、他の子供と考えを共有する中で自分の考えを形成しながら書く活動につなげられるようにする。